南砺市埋蔵文化財調査報告書 22

富山県

# 南砺市埋蔵文化財分布調査報告3

－福光地域2－

2007年度

2008年3月

南砺市教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

南砺市埋蔵文化財調査報告書 22

富山県

# 南砺市埋蔵文化財分布調査報告3

## ー福光地域2ー

2007年度

2008年3月

南砺市教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

# 序

南砺市には、国指定の高瀬遺跡や世界遺産にも登録されている相倉・菅沼の合掌造り集落などの貴重な文化財が数多く存在しています。また、遥か太古からの先人の営みも残されており、立野ヶ原台地における旧石器時代の遺跡群をはじめ、市内の各所には縄文時代から中近世までの遺跡が多数確認されています。

このような文化財は、現代に生きる我々が未来へと受け継ぐ財産です。地域で産まれ、育まれてきた文化財は保護・活用することで地域の発展に貢献すると考えております。市内に残された遺跡は市の歴史を語るうえで他に変えることのできない貴重な資料であり、大切な文化遺産です。

市教育委員会では遺跡の把握、保存に努めるために詳細分布調査を行っています。市内の遺跡地図を充実させることは、今後の遺跡の保存と整備、開発行為との調整において欠かせません。

この報告書が今後の学術研究や、郷土の歴史を知るための参考となり、文化財保護に対する理解の一助になりましたら幸いです。

最後に、調査の実施にあたり、多大なご協力とご理解をいただきました地元の方々、関係者の方々に深く感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年３月

南砺市教育委員会
教育長　梧 桐 角 也

# 例　　言

1　本書は南砺市教育委員会が国庫補助をうけて実施している、市内遺跡詳細分布調査（2007年度）の調査報告である。

2　調査は富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、南砺市教育委員会が主体となり実施した。

3　今年度の調査は、福光地域のうち、山田・赤坂・出村・縄蔵・天池・吉江野・大西・土生・土生新・樋瀬戸・七曲・嫁兼・道場原地区を対象とした。現地調査期間は次のとおりである。

平成19年４月14日(土)～４月15日(日)、９月29日(土)

4　調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長林浩明、文化財保護主事佐藤聖子が調査事務を担当し、文化課長中島眞市が総括した。現地踏査、資料の整理、本書の執筆と編集は、以下の調査担当者、調査補助員が分担して行い、執筆の分担は文末に記した。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査担当者 | 富山大学人文学部考古学研究室 | 教　授 | 黒崎　直 |
| | 同 | 准教授 | 高橋浩二 |
| | 南砺市教育委員会文化課文化財係 | 文化財保護主事 | 佐藤聖子 |
| 調査補助員 | 小林高太・高橋彰則（富山大学人文学部考古学研究室大学院生） | | |
| | 赤座裕子・小川絵理香・北村志織・小松彩乃・下嶋明日香・竹中庸介・栃堀哲彦 | | |
| | 松岡治奈・皆川恒子・山崎　翔・吉田有里（富山大学人文学部考古学研究室四回生） | | |
| | 坂上菜美子・坂田裕之・佐藤雄太・高畑郁美・細丸善弘・増永佑介・松木綾子 | | |
| | 村上　直・横幕　真（富山大学人文学部考古学研究室三回生） | | |
| | 今津和也・上原利予・千葉真吾（富山大学人文学部考古学研究室二回生） | | |

5　現地調査にあたって、福光地域の方々に多大なご理解、ご協力を得た。記して深く感謝したい。

6　採集遺物および記録図面等は、南砺市教育委員会が保管している。

7　本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1)方位は真北である。

(2)挿図の遺物実測図の縮尺は１／３、遺物写真図版の縮尺は１／２に統一した。

(3)写真図版の遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。

# 本文目次

序　　文
例　　言
目　　次
Ⅰ　位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の経過 …… 2
第１表　調査区内周知の埋蔵文化財包蔵地 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 6
　1　遺跡と採集遺物 …… 6
　2　遺物の散布状況 …… 8
　3　平成18(2006)年度調査地区との比較 … 9
Ⅳ　まとめ ……10
参考文献 ……11
第２表　調査結果遺跡一覧表 ……12
図　　版
写真図版

# 図版目次

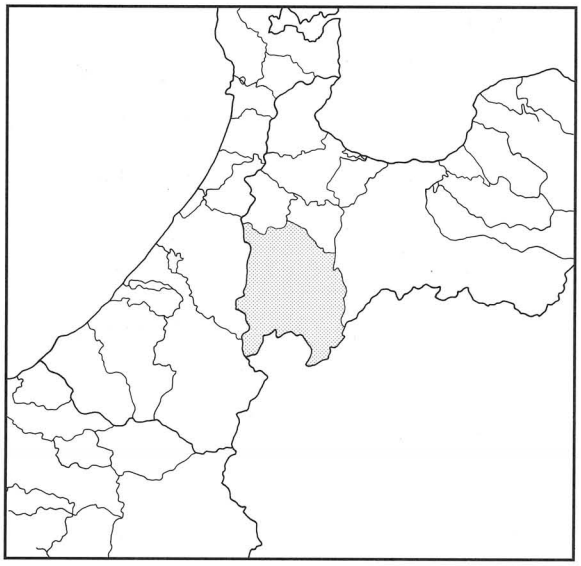
第１図　南砺市位置図
第２図　調査地区割図（１／200,000）
第３図　調査地区概要図（１／30,000）
第４図　調査結果概要図１（１／15,000）
第５図　調査結果概要図２（１／20,000）
第６図　縄文時代の遺物散布状況（１／20,000）
第７図　古代の遺物散布状況（１／20,000）
第８図　中世の遺物散布状況（１／20,000）
第９図　近世の遺物散布状況（１／20,000）
第10図　遺物実測図（1）
第11図　遺物実測図（2）

# 写真図版目次

図版１　遺跡全景（1）
図版２　遺跡全景（2）
図版３　遺跡全景（3）
図版４　遺物写真（1）
図版５　遺物写真（2）

# Ⅰ　位置と環境

平成16年11月１日、砺波地方所在の八町村であった福野町、福光町、井波町、城端町、井口村、平村、上平村、利賀村が合併し南砺市が誕生した。南砺市は富山県の南西部端に位置し、西は石川県金沢市、南は岐阜県飛騨市や白川村に隣接している。山間部は、白山国立公園に指定され、すぐれた自然景観を残しており、庄川や小矢部川の流れる平野部は水田地帯として、また、「散居村」として知られている。面積は668.86平方㎞で東西26㎞、南北39㎞に広がっている。



第１図　南砺市位置図

南砺市の地形は、東南側に高清水山から袴腰山に連なる高清水山地、西側に医王山・黒瀑山を有する山地と、この山地を開析して北流する山田川流域の複合扇状地にわけられる。

旧石器時代の遺跡は、福光・城端両地域の境に位置する立野ヶ原を中心に広がっており、点在する144か所の遺跡は立野ヶ原遺跡群と呼ばれている。めのうや鉄石英が豊富で、それらを利用した石器製作場所がいくつか確認されており、富山県内で最も古い遺跡群の１つとして知られている。

縄文時代に入ると、生活の場は平野部にも広がる。草創期から前期にかけて確認している遺跡数は少ないものの、中期には西原Ａ遺跡や徳成遺跡、後・晩期には後期の指標遺跡である井口遺跡をはじめ安居五百歩遺跡、五瀬遺跡がある。

弥生・古墳時代の遺跡は、確認されている数が少ないが、近年のほ場整備事業等により神成遺跡では、弥生終末期から古墳時代にかけての竪穴住居や周溝遺構を確認しており、また梅原安丸Ⅲ遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居を確認している。

古代の遺跡には、７世紀、９世紀の竪穴住居跡を約10棟確認した在房遺跡や、９世紀前半の梅原落戸遺跡がある。その他、中世の指標となる大集落として知られる梅原胡摩堂遺跡の東側で、８世紀から10世紀にかけての竪穴住居等の遺構を確認している。またこれら古代の集落に須恵器を供給していたであろう窯に安居・岩木窯跡群がある。

中世には、平野部に大規模な集落が広がる。梅原胡摩堂遺跡をはじめ久戸遺跡から、田尻遺跡に至る中世集落跡は南北２㎞、東西１㎞にわたり、掘立柱建物、竪穴状土坑、井戸、区画溝などの遺構や、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸などの遺物が多く確認されている。

今年度の対象地域は、山田・赤坂・出村・縄蔵・天池・吉江野・大西・土生・土生新・樋瀬戸・七曲・嫁兼・道場原である。この地域内における主な遺跡については、先述の立野ヶ原遺跡群がまずあげられる。昭和47年から昭和52年度まで実施された調査では、石器製作場所（ユニット）の検出他、縄文時代中期の石組炉、土坑、縄文時代晩期の北陸における標式的土器が一括出土するなど、富山県内における旧石器時代、縄文時代の研究においても重要な位置を占める資料が多数確認されている。その他の遺跡には、縄文時代中期の遺物散布が確認されている土生新遺跡、伝承から経塚があるとされ、地名にもその名を残す土生新経塚、南北朝時代の五輪塔が多数出土した高宮野丹保遺跡などがある。

（佐藤聖子）

# Ⅱ　調査の経過

平成16年11月の町村合併までに各々の旧町村で確認していた埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」）の数は、590ヶ所あまりである。これらの包蔵地の多くは、古い伝承に基づくもの、開発行為にかかる事前調査によって発見されたものである。町村合併時において、詳細な分布調査が行われていたのは、旧福野町全域、旧城端町域の平野部、旧福光町・旧井口村域において県営ほ場整備事業等の大規模な開発行為が行われた地域のみであった。未だ包蔵地の詳細が全く確認されていない未調査地区が多く、また包蔵地の保護と開発行為との円滑な調整を計っていくためにも、詳細な分布調査を実施することとなった。

分布調査の実施については、旧城端町で平成13年度より７ヶ年にわたって町全域を調査する予定にしていたが、町村合併にあたり計画変更を行い、平成18、19年度に調査予定であった旧城端町域の山間部を先送りし、未だ未調査地区が多い南砺市の平野部について先行し調査を行うこととした。

南砺市平野部における未調査地区は、福光地域（調査実施済みである北山田地区、高宮・小林・殿の一部、岩木、祖谷、竹内を除く）、井口地域の一部、井波地域である。このうち、福光地域を４分割、井波地域を２分割し、未調査地区を７分割し７ヶ年で南砺市平野部の調査を実施することとした（第２図参照）。調査の成果は年度毎にまとめ公表する予定である。

調査は、南砺市が国庫補助を受け、富山大学考古学研究室の指導・協力を得て進めることとした。現地踏査は、春期が平成19年４月14日・15日の２日間、秋期が平成19年９月29日の１日間、計実働３日間で行い、のべ71名が参加した。1／2,500の地形図を持参し、田畑一枚一枚をくまなく踏査し、土器、石器等の遺物を採集して採集地点を図面に記録した。採集した遺物は、洗浄後採集地点を注記し、実測作業をおこなった。その後、遺物の散布状況、地形、伝承等も加味しつつ、包蔵地の範囲を決定した。

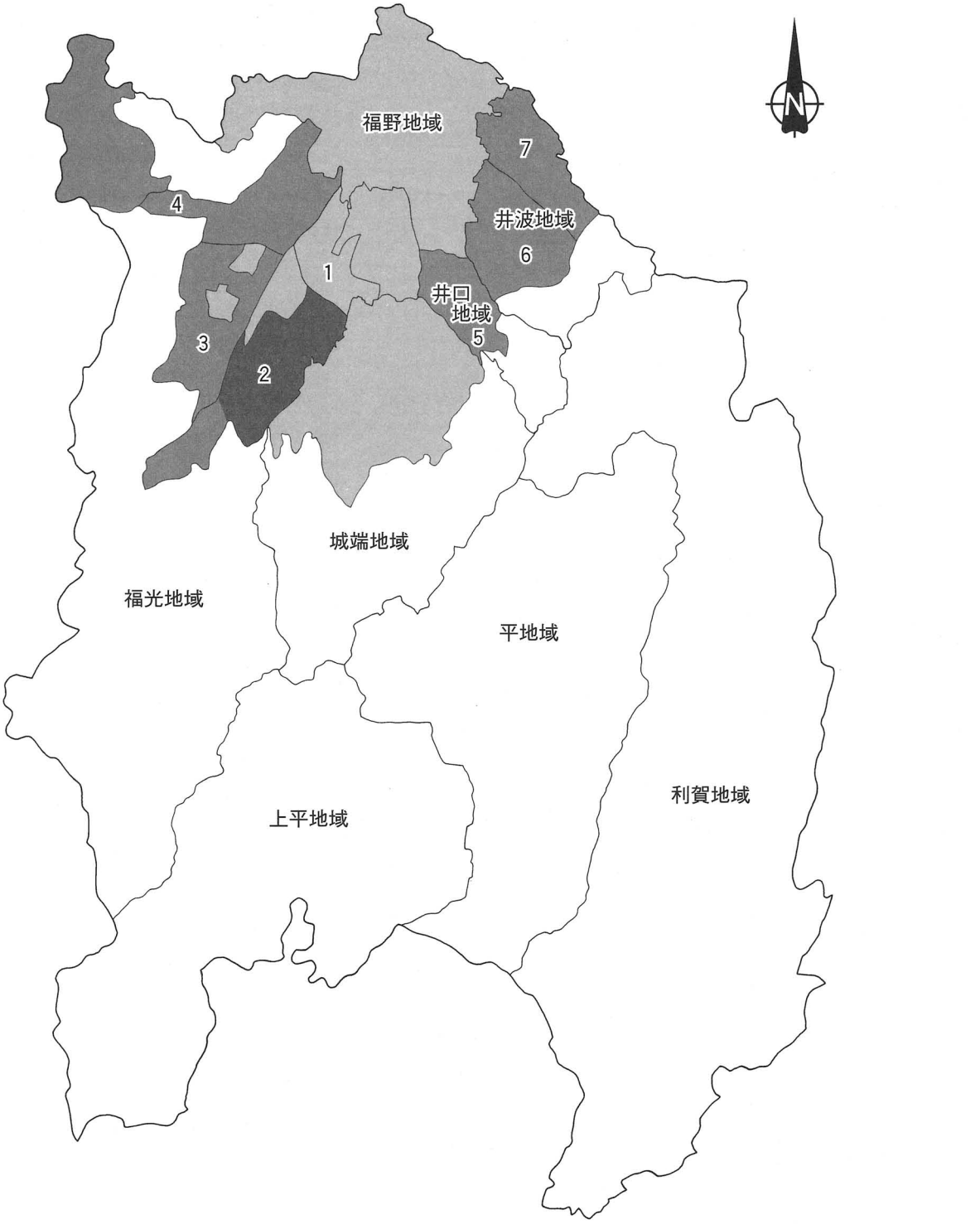
今年度の調査対象地において、調査実施までに確認している周知の包蔵地及び調査履歴については、第１表のとおりである。

（佐藤聖子）

**第１表　調査区内周知の埋蔵文化財包蔵地**

| 遺跡名 | ふりがな | 所在地 | 主な時代 | 種　別 | 調査履歴 | 調査原因 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| THJ−19 | てぃーえっちじぇー−じゅうきゅう | 大塚、天池、山田 | 縄文、古代、中世、近世 | 縄文散布地、古代散布地、中世散布地、近世散布地 | 昭和63年試掘 | 東海北陸自動車道建設 | |
| | | | | | 昭和63年試掘 | 団営ほ場整備事業 | |
| | | | | | 平成7年試掘 | 個人住宅建設 | |
| THJ−20 | てぃーえっちじぇーーにじゅう | 縄　蔵 | 中　世 | 中世散布地 | 平成7年試掘 | 東海北陸自動車道建設 | |
| 高宮野丹保 | たかみやのたんぼ | 高　宮 | 中世、近世 | 中世散布地、近世散布地 | 平成13･14･15年試掘、平成16･17年本調査 | 県営ほ場整備事業 | |
| 土生新 | はぶしん | 土生新字経塚 | 縄文中 | 縄文中散布地 | | | |
| 土生新経塚 | はぶしんきょうづか | 土生新字経塚 | 中世、近世 | 中世経塚、近世経塚 | | | |
| 有田ケ原E | ありたがはらいー | 大西、土生新 | 旧石器、縄文中、縄文晩 | 旧石器散布地、縄文中集落、縄文晩散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 番人原A | ばんじんばらえー | 大　西 | 縄文草、弥生終 | 縄文草散布地、弥生終散布地 | 昭和50年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 草創期の石器はメノウを原材とし、石器製作を行うユニットを形成していたと思われる。 |
| 番人原B | ばんじんばらびー | 大　西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和50年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 番人原C | ばんじんばらしー | 大　西 | 縄文、古代 | 縄文散布地、古代散布地 | 昭和50年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 番人原D | ばんじんばらでぃー | 大　西 | 縄文、平安 | 縄文散布地、平安集落 | 昭和51年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 立野ヶ原で唯一平安時代の土坑を確認している |
| 京塚 | きょうづか | 大　西 | 縄文中、中世、近世 | 縄文中散布地、中世祭祀、近世祭祀 | 昭和52年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 万年台A | まんねんだいえー | 大　西 | 旧石器、縄文 | 旧石器散布地、縄文散布地 | 昭和51年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 万年台B | まんねんだいびー | 大　西 | 旧石器、縄文 | 旧石器散布地、縄文散布地 | 昭和51年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 旧石器時代の石器群は、濃飛流紋岩系・鉄石英の二種類の石材を用いている。 |
| 万年台C | まんねんだいしー | 立野原西 | 縄文中、縄文前 | 縄文前散布地、縄文中散布地 | 昭和50年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 有田ケ原A | ありたがはらえー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 有田ケ原B | ありたがはらびー | 立野原西 | 縄文前、縄文後、弥生後 | 縄文前散布地、縄文後散布地、弥生後散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 有田ケ原C | ありたがはらしー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文中散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 有田ケ原D | ありたがはらでぃー | 立野原西 | 縄文中 | 縄文中集落 | 昭和50年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 縄文中期石組炉、土坑を検出 |
| 中尾台A | なかおだいえー | 立野原西 | 縄文前、縄文中 | 縄文前散布地、縄文中散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |

| 遺跡名 | ふりがな | 所在地 | 主な時代 | 種　別 | 調査履歴 | 調査原因 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中尾台B | なかおだいびー | 立野原西 | 縄文中、縄文後 | 縄文中散布地、縄文後散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台C | なかおだいしー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台D | なかおだいでぃー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台F | なかおだいえふ | 立野原西 | 縄文中 | 縄文散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台I | なかおだいあい | 立野原西 | 縄文早、縄文中 | 縄文早散布地、縄文中散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台J | なかおだいじぇー | 立野原西 | 縄文前 | 縄文前散布地 | 昭和52年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台K | なかおだいけー | 立野原西 | 旧石器、縄文中 | 旧石器散布地、縄文散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 先土器時代の鉄石英を主とするユニットを発見した。 |
| 中尾台L | なかおだいえる | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台M | なかおだいえむ | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和52年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台N | なかおだいえぬ | 立野原西 | 縄文、中世 | 縄文散布地、中世散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台O | なかおだいおー | 立野原西 | 古　代 | 古代散布地 | 昭和47年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中尾台P | なかおだいぴー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | | | |
| 中尾台Q | なかおだいきゅー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | | | |
| 中地山A | なかちやまえー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中地山B | なかじやまびー | 立野原西 | 縄文中、平安 | 縄文中散布地、平安散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立美A | たつみえー | 立　見 | 縄文草、縄文前、縄文晩、弥生中、古代 | 縄文草散布地、縄文前散布地、縄文晩散布地、弥生中散布地、古代散布地 | 昭和51年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 縄文時代草創期のユニットを検出、石器は鉄石英を主に用いている。 |
| 立美B | たつみびー | 立野原西 | 縄文中、縄文晩、弥生後 | 縄文中集落、縄文晩散布地、弥生後散布地 | 昭和50年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 北陸地方の縄文時代中期中葉に属する標式的土器が一括出土。 |
| 神明原A | しんめいばらえー | 立野原西 | 縄文早、縄文前、縄文中、縄文後、縄文晩 | 縄文早集落、縄文前集落、縄文中集落、縄文後散布地、縄文晩散布地 | 昭和51年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 早期の住居跡は、北陸で最初の発見例 |
| 神明原B | しんめいばらびー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和51年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 神明原C | しんめいばらしー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 開発田A | かいほつでんえー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 開発田B | かいほつでんびー | 立野原西 | 旧石器、縄文前、縄文中 | 旧石器散布地、縄文前散布地、縄文中散布地 | 昭和48年本調査<br>昭和59年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業<br>防災ダム建設採土事業 | 先土器のユニットは約7m×3mの大きさ |
| 開発田C | かいほつでんしー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | | | |
| 大　西 | おおにし | 立野原西 | 縄文中、縄文後、縄文前 | 縄文中散布地、縄文後散布地、縄文前散布地 | 昭和48年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立　美 | たつみ | 立野原西 | 旧石器、縄文草、縄文早、縄文前、縄文中、弥生後 | 旧石器散布地、縄文草散布地、縄文早散布地、縄文前散布地、縄文中散布地、弥生後散布地 | 昭和49年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 先土器時代のユニットが4ヶ所にあり、いずれも黒曜石を主な石器材料としている。 |
| 立野新A | たてのしんえー | 土生新 | 旧石器、縄文晩 | 旧石器散布地、縄文晩散布地 | 昭和50、51年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新B | たてのしんびー | 立野新 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新C | たてのしんしー | 土生新 | 縄文、近世 | 縄文散布地、近世散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新D | たてのしんでぃー | 立野原西 | 縄文中 | 縄文中散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新E | たてのしんいー | 立野原西 | 縄文前 | 縄文前散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新F | たてのしんえふ | 立野原西 | 縄文中、弥生 | 縄文中散布地、弥生散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新G | たてのしんじー | 立野原西 | 縄文中 | 縄文散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新H | たてのしんえっち | 土生新 | 縄文早、中世 | 縄文早散布地、中世散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新I | たてのしんあい | 土生新 | 旧石器、縄文早、縄文晩 | 旧石器散布地、縄文早散布地、縄文晩散布地 | 昭和51年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 立野新J | たてのしんじぇー | 土生新 | 縄文晩、弥生前、鎌倉、近世 | 縄文晩集落、弥生前散布地、鎌倉散布地、近世散布地 | 昭和52年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | 水神平式土器、縄文時代晩期の土器が出土。 |
| 立野新K | たてのしんけー | 土生新 | 不　明 | 不明散布地 | | | |
| 中台A | なかだいえー | 立野原西 | 縄文早、縄文中 | 縄文草散布地、縄文中散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 中台D | なかだいでぃー | 立野原西 | 旧石器、縄文前 | 旧石器散布地、縄文前散布地 | 昭和49年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 二郎江門堂台A | じろうえもんどうだいえー | 立野原西 | 縄文前 | 縄文前散布地 | 昭和48年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 二郎江門堂台B | じろうえもんどうだいびー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和48年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 二郎江門堂台C | じろうえもんどうだいしー | 立野原西 | 縄文中 | 縄文中散布地 | | | |
| 二郎江門堂台D | じろうえもんどうだいでぃー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | | | |
| 二郎江門堂台E | じろうえもんどうだいいー | 立野原西 | 無 | 縄文散布地 | | | |
| 是ケ谷A | これがたにえー | 立野原西 | 縄　文 | 縄文散布地 | 昭和48年試掘 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 是ケ谷B | これがたにびー | 七　曲 | 縄　文 | 縄文散布地 | | | |
| 是ケ谷C | これがたにしー | 七　曲 | 縄文早、縄文中、縄文後 | 縄文早散布地、縄文中散布地、縄文後集落 | 昭和47年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 是ケ谷D | これがたにでぃー | 七　曲 | 縄　文 | 縄文散布地 | | | |
| 是ケ谷池 | これがたんいけ | 七　曲 | 中　世 | 中世不明 | | | |
| 鉄砲谷 | てっぽうだに | 大　西 | 旧石器、縄文 | 旧石器散布地、縄文散布地 | 昭和47年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | A地点では400点をこえる鉄石英を主とした剥片、B地点では流紋岩を主とする160点あまりの剥片やナイフ形石器が出土 |
| 坂ズリ | さかずり | 大　西 | 旧石器、縄文 | 縄文散布地 | 昭和54年試掘 | 臼中ダム建設に伴う土取り | |
| 向山鳥 | むかいやまじま | 樋瀬戸 | 縄文早、縄文前、縄文中、縄文後、縄文晩 | 縄文早散布地、縄文前散布地、縄文中散布地、縄文後散布地、縄文晩散布地 | 昭和47年本調査 | 県営立野ヶ原地区総合パイロット事業 | |
| 樋瀬戸道場跡 | ひのせとどうじょうあと | 樋瀬戸 | 中世、近世 | 中世社寺、近世社寺 | | | |
| 七　曲 | ななまがり | 七　曲 | 旧石器、縄文、古代 | 旧石器散布地、縄文散布地、古代散布地 | | | |



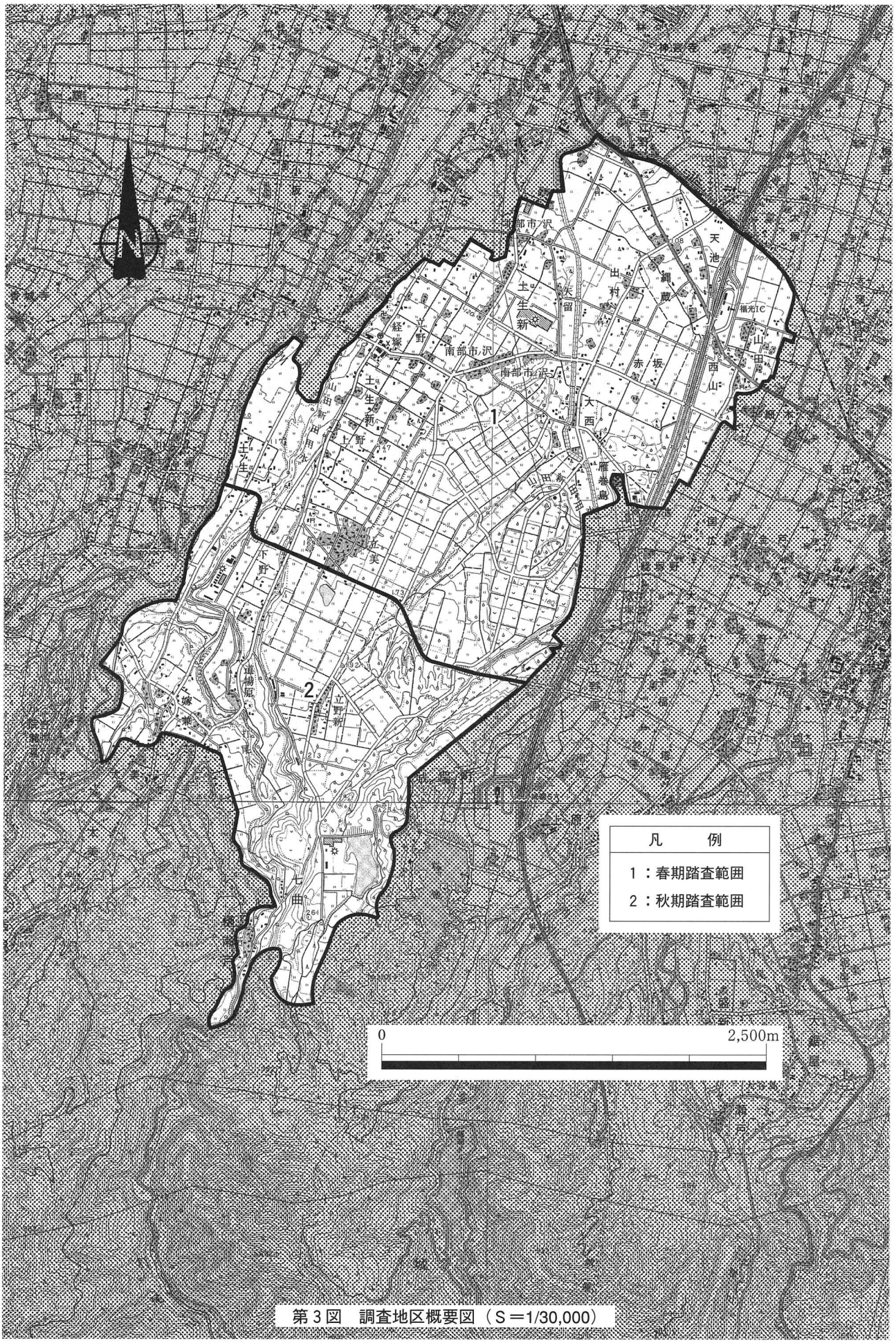

年度別調査実施予定

| 番号 | 地　域　別 |
|---|---|
| 1 | 平成18年度調査実施地域 |
| 2 | 平成19年度調査実施地域 |
| 3 | 平成20年度調査予定地域 |
| 4 | 平成21年度調査予定地域 |
| 5 | 平成22年度調査予定地域 |
| 6 | 平成23年度調査予定地域 |
| 7 | 平成24年度調査予定地域 |

凡　例

- 調査完了地域（平成18年度迄）
- 平成19年度調査実施地域
- 平成20年度以降調査予定地域
- 平成25年度以降調査予定地域

第２図　調査地区割図（Ｓ＝1/200,000）




第３図　調査地区概要図（Ｓ＝1/30,000）

# Ⅲ　調査の概要

## 1　遺跡と採集遺物

### （1）土生新遺跡

採集した遺物は縄文土器17片、石器５点、珠洲２片、越中瀬戸３片、近世陶器15片、近世磁器６片である。そのうち15点を図化した。

１は縄文土器深鉢の口縁部である。口径は約30cmを測る。中期中葉の上山田式から古府式に属するものであろうと思われる。外面に半截竹管による半隆起線を施す。胎土には砂礫が混じり、色調は内外面ともに茶褐色を呈する。焼成は良好である。

２は縄文土器胴部破片で、時期不明である。文様などはみられない。胎土は砂礫を含み、色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

３は縄文土器深鉢の胴部で、時期不明である。外面は風化しているが、一部に縄文がみられる。胎土は砂礫を含み、色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

４は打製石斧であるが基部が欠けている。長さ7.3cm、最大幅4.4cm、刃部3.6cm、重さ58ｇであり、石材は安山岩である。形態分類は短冊形と思われる。

５は磨製石斧である。長さ9.7cm、最大幅4.9cm、刃部幅4.0cm、重さ215ｇであり、石材は蛇紋岩である。表面、裏面、一方の側面に研磨した痕跡が見られる。また、もう一方の側面の上部から基部の先端にかけて、敲打の痕跡が見られるため、この部分は他の用途に転用された可能性が考えられる。

６は石匙であるが基部が欠けている。長さ2.9cm、最大幅4.6cm、重さ８ｇであり、石材は安山岩である。三角形を呈しており、一部に押圧剥離が見られる。横型石匙かと思われる。

７は石錘である。長さ3.8cm、最大幅3.7cm、重さ27ｇであり、石材は安山岩である。一部欠けているが、円石の両端に縄かけ用の切込を施している、切目石錘である。

８は磨製石斧の刃部である。長さ3.4cm、最大幅3.5cm、刃部幅2.0cm、重さ23ｇであり、石材は蛇紋岩である。表面、裏面、側面に研磨した痕跡が見られる。また、刃部には使用痕が見られる。

９は珠洲の甕か壺の体部である。内面において一部でナデ調整が施されている。胎土は密である。色調は内外面ともに青灰色を呈する。焼成は良好である。

10は近世以降の磁器小皿である。口径は約７cm、底径は約4.5cmを測る。外面に淡青色の釉、内面に透明な釉がかかる。高台は削りだし高台である。胎土は密であり、色調は断面白色で口縁部では赤色を呈する。焼成は良好である。

11は越中瀬戸小皿の底部である。底径は約５cmを測る。内面にはロクロナデ調整、外面にはロクロケズリ調整を施す。内面の一部に赤褐色の釉を施す。高台は削りだし高台である。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

12は近世陶器の底部である。底径は約10cmを測る。内面はロクロナデ、外面はともにロクロヘラケズリ調整を施す。胎土は密であり、色調は淡茶褐色を呈する。土師質で、焼成は良好である。

13は施釉陶器碗の底部である。底径は約７cm内外面に黒褐色の釉を施す。削り出し高台で高台付近は無釉である。調整はロクロナデである。胎土は密で１mm以下の砂粒が混じる。色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

14は施釉陶器すり鉢の口縁部である。口径は約32cmを測る。全体に褐色の釉で濃淡を施す。内面には１cm幅で７本の卸目を全面に施す。胎土は密であり、１mm以下の砂粒を含む。色調は断面灰白色を呈し、焼成は良好である。

15は施釉陶器すり鉢の底部である。底径は14cmを測る。内外面に黒褐色の釉を施す。削りだし高台で、高台付近は無釉である。内面と高台に重ね焼きの跡がみられる。調整はロクロケズリである。内面には２cm幅で７条の卸目を施す。胎土は密で１mm以下の砂粒が混じる。色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

（今津和也、上原利予、千葉真吾）

（２）土生新市野沢遺跡

採集した遺物は須恵器１片、土師器１片、近世陶器４片である。そのうち２点を図化した。

16は須恵器の甕か壺の体部である。内面に当て具痕、外面にタタキ目を施す。胎土は密であり、１mm程度の砂粒を含む。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。

17は施釉陶器椀の口縁部である。口径は約12cmを測る。内外面ともにロクロナデ調整、黒色の釉を施す。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈し、焼成は良好である。（上原利予）

（３）有田ヶ原Ｃ遺跡

遺物は、地元住民が本遺跡内で以前に採集したものを提供していただいた石器１点であり、これを図化した。

18は磨製石斧で刃部を欠く。長さ12.5cm、最大幅6.0cm、重さ393gであり、石材は閃緑岩である。表裏面上部と側面に研磨の跡があるが、全体的に風化が進み加工の痕跡は少ない。（千葉真吾）

その他の採集遺物

遺跡範囲外の採集品についても、将来的な遺跡発見の可能性を高めるため、すべての採集地点を記録している。そのうち主なものについて示す。

19は打製石斧の基部である。長さ6.3cm、最大幅5.8cm、重さ101ｇであり、石材は凝灰岩である。側面中央部から上部にかけて敲打の痕跡がみられる。

20は打製石斧であるが基部が欠けている。長さ11.0cm、最大幅5.5cm、基部幅4.1cm、刃部幅4.8cm、重さ166gであり、石材は安山岩である。形態的には撥形に属する。

21は打製石斧である。長さ16.4cm、最大幅6.7cm、基部幅5.2cm、重さ498ｇであり、石材は不明である。刃部が大きく欠けているが、刃部幅は推定約7.0cmであると思われる。基部から刃部にかけて、ほとんど抉れていないため、形態的には短冊形に属すると思われる。

22は珠洲の甕か壺の胴部である。胎土は密で３mm以下の砂粒が混じる。外面は３cm幅で６条のタタキ目、内面にはロクロナデ、指圧痕が残る。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

23は施釉陶器の底部である。底径は約11cmを測る。器種は不明である。内外面ともにロクロケズリ調整、内面は白色の釉を施す。外面の一部に透明な釉が残る。胎土は密である。色調は淡灰白色を呈し、焼成は良好である。

24は経石である。長さ8.5cm、最大幅4.3cm、重さ103ｇであり、石材は不明である。両面に墨書で「南無阿弥陀佛　明治三十一年」と書かれている。

25は越中瀬戸皿の底部である。底径は約５cmを測る。高台は削りだし高台である。調整は外面がロクロケズリ、内面はロクロナデである。胎土は密で３mm以下の砂粒が混じる。色調は淡茶褐色を呈する。焼成は良好である。

26は越中瀬戸皿の底部である。底径は約10cmを測る。胎土は密であり、１mm程度の砂粒を含む。内外面ともにロクロナデ調整を施す。体部内面に黄褐色の釉を施す。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。

27は施釉陶器椀の口縁部である。口径は約10cmを測る。濃褐色の釉の上に、外面は白色の釉で波状の模様が描かれている。胎土は密で、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。

28は陶器土瓶の口縁部である。口径は約９cmを測る。胎土は密である。色調は外面が暗緑褐色を、内面が黄白色を呈する。焼成は良好である。

29は施釉陶器碗の底部である。底径は約５cmを測る。内面全体と外面の一部に明緑灰色の釉を、外底面に赤褐色の釉を施す。高台は削りだし高台である。外面の調整はロクロケズリである。胎土は密で３mm以下の砂粒が混じる。色調は、外面は赤褐色、断面は青灰色を呈する。焼成は良好である。

30は施釉陶器皿の底部である。底径は約3.5cmを測る。内外面に白色釉を施したのち、内面見込を削る。削りだし高台で、高台付近は無釉である。胎土は密で、色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。

31は施釉陶器皿の底部である。底径は約８cmを測る。内面に黒色の線状の模様が描かれており、その上に透明な釉を施す。内外面ともにロクロナデ調整を施す。外面の一部にユビナデ痕が見られる。高台は削りだし高台である。胎土は密である。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

32は施釉陶器椀の底部である。底径は約4.5cmを測る。内外面に白色の釉を施す。高台は貼りつけ高台である。調整はロクロナデである。胎土は密で１mm以下の砂粒が混じる。色調は断面淡茶褐色を呈する。焼成は良好である。

33は施釉陶器皿の底部である。底径は約５cmを測る。内面と外面の一部に褐色の釉を施す。調整はロクロナデである。胎土は密で３mm以下の砂粒が混じる。色調は淡青灰色を呈する。焼成は良好である。

34は施釉陶器すり鉢の底部である。底径は約18cmを測る。外面はロクロケズリ調整を施す。かなり摩滅しているが外面の一部に赤褐色の釉が残る。左回転の卸目10条を残す。胎土は密である。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

35は近世骨壺の体部である。内外面ともにロクロナデ調整を施す。外面に墨で文字が書かれている。胎土は密であり、１mm以下の砂粒を含む。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

36は土製人形の破片である。胎土は密で１mm以下の砂粒が混じる。色調はにぶい橙色を呈する。土師質で焼成は良好である。

（上原利予、千葉真吾）

## 2　遺物の散布状況

今回の調査で採集した遺物の総数は108片である。これらの散布状況を時期別に大別、集計した。散布状況は一辺250mの方眼を設け、方眼１つを１ブロックとして、ブロック単位で採集遺物点数を示すこととする。

各時期の総量は縄文27、古代１、中世３、近世62、近代11、時期不明４片である。

### （１）縄文時代の遺物散布状況（第６図）

縄文時代の遺物は、縄文土器18片、石器９点を６つのブロックから採集した。

縄文土器はすべて土生新遺跡から採集され、石器のうち５点は土生新遺跡からの出土である。今年度の調査区内には立野ヶ原台地上に多くの縄文遺跡が存在するが今回の調査では遺物の採集はなかった。

### （２）古代の遺物散布状況（第７図）

古代の遺物は須恵器１片を１つのブロックから採集した。

（3）中世の遺物散布状況（第8図）

中世の遺物は珠洲3片を3つのブロックから採集した。

珠洲2点は土生新遺跡から採集した。土生新遺跡に隣接する土生新経塚との関係も考えられるが、採集点数が少ないことから他からの混入も考えられる。もう1点は遺跡範囲外からの採集である。このほかに中世と断定できる遺物は見られなかった。

（4）近世の遺物散布状況（第9図）

近世の遺物は越中瀬戸14片、それ以外の陶器20片、磁器21片を33のブロックから採集した。

近世の遺物の多くは土生新遺跡周辺から採集したが、ほかにも調査区北部においてまばらにではあるが採集している。（高橋彰則）

## 3　平成18（2006）年度調査地区との比較

2006年度と今年度実施の分布調査範囲とは、同じ南砺台地上にあり、前者は砺波平野へと至る台地北端部を占め、後者は丘陵部を中心とする。南砺台地の西側には小矢部川が、東側には山田川が存在し、また台地中央には小河川の大井川が北流しており、水系的にも同じ地域に属している。したがって、両地区における各時期の遺物の散布状況や量を比較することは、ひとつの地域における長期間の土地利用の変遷を知る上で重要なことと思われる。以下、2006年度の遺物採集点数と比較する形で見ていきたい。

縄文時代の遺物は、2006年度は土器29片と打製石器1点が4つのブロックから採集されている。今回ともに点数としては必ずしも多いと言えない。しかし、遺跡･散布地の数自体は、立野ヶ原遺跡群をはじめとして60以上が南砺台地上から集中して確認されている。

弥生・古墳時代の遺物は、前回と今回を通じて確実なものは1点も採集されていない。この時期には主に平野部への遺跡の進出が予想される。ただし、昨年度地区に隣接する山田川西岸には3基の円形周溝状遺構と古墳出現期の多数の土器が検出された神成遺跡が近年明らかにされており、台地上にあっても河川沿いなどには少数ながら遺跡が存在することが考えられる。

古代の遺物は、2006年度は須恵器198片が48のブロックから採集されている。とりわけ2006年度地区の北側のブロックに集中し、それに対して南側のブロックでは数片が採集されたにすぎない。したがって、2006年度地区の南半から今年度地区にかけて、採集遺物量が急激に減少していることがわかる。

中世の遺物は、2006年度は珠洲焼97片、八尾焼3片、青磁2片、土師器43片が47のブロックから採集されている。2006年度地区の南側ブロックにおいては数片しか見つかっておらず、古代と同じ様相を呈する。このように、南砺台地上における古代から中世にかけての遺物散布にはきわめて興味深い偏在的状況が認められる。

近世の遺物は、2006年度は越中瀬戸42片、それ以外の陶磁器片142片が57のブロックから採集されている。この段階には2006年度地区の南側ブロック以南でも広い範囲で遺物の散布が見られるようになる。

もとより分布調査からの限定的な評価ではあるが、各段階の遺物散布状況から南砺台地上における土地利用のあり方がある程度推測できるのではないかと思われる。すなわち、古墳時代以前の様相はほとんど明らかでないが、古代から中世にかけては台地北端部を中心にして拠点的な開発がすすめられていったことが伺える。

より標高の高い台地南側へと開発や居住が広範にすすむのは近世以降のことと捉えられるが、開発や居住が短期間のうちに進展したのか、それとも数十年単位で段階的に及んでいったのかについては、明確にすることはできなかった。（高橋浩二）

# Ⅳ　まとめ

今年度の分布調査は、南砺市の西部を占める旧福光町において、昨年度調査範囲の南に接する「山田（南半）」「東太美」「太美山」の各地区を対象として実施した。その範囲は、小矢部川と山田川にはさまれた標高約100～240mの南砺台地北端部にあたり、その中央部を大井川が北流している。

今回対象とした地区やその周辺には、縄文時代の遺跡が比較的多く分布するのに対し、弥生や古墳時代の遺跡は全くといっていいほど確認されていない。これに対し縄文時代を遡る旧石器時代の遺跡は、「南山田地区」の「立野ケ原」を中心に分布が知られており、隣接する今回の調査地にも数箇所の同時代遺跡が知られている。

一方、古代に至ると次第に遺跡の数が増加しはじめる。古代越中国には「砺波郡」が設置されるが、旧福光町もその内に含まれ、平野部には東大寺の荘園が形成される。そして山田川と大井川の合流地点南側の台地上にあたる「北山田地区」には、付け作りのカマドを備えた竪穴住居７棟が発掘された７世紀前半の「在房遺跡」が出現する。同地の周辺にはその後、「梅原遺跡群」や「宗守遺跡」など８～９世紀にかけて遺跡が形成されていく。

ただし古代の遺跡の分布は、標高約60m以下が中心で、それ以上の標高を持つ昨年度や今年度の調査範囲内では未だ確認された遺跡は少ない。

中世に至ると、梅原遺跡群が形成された「北山田地区」を中心にさらに多数の遺跡が形成される。とくに「梅原胡摩堂遺跡」のように、中世荘園村落から「寺内町」へと発展変化する特徴的な遺跡も存在し、旧福光町内の一つの中心を形成したことがうかがえる。しかし今回の調査範囲内では、古代と同様さほど中世の遺跡は知られていない。古代・中世の福光町内では、標高約60～70m付近が、開発の一つの境目であったのかも知れない。

今回の調査対象範囲内には、これまでに71遺跡が周知されていたが、今回の調査においてあらたに１箇所で遺跡を発見した（第２表）。また71遺跡のうち１箇所の遺跡で、その範囲が拡張することになった。以下にその概要を記しておこう。

新発見の遺跡は、「土生新市野沢遺跡（はぶしんいちのさわ）」である。ここからは、須恵器１片・土師器１片・近世陶器４片が採取され、近世に主体を持つ遺跡。南北約800m、東西約250mの範囲を推測しておきたい。

次いで、範囲を拡張した遺跡は「土生新遺跡」であり、南へ約1200m、東へ約400mと大幅に拡大した。従来この遺跡では、小矢部川を望む段丘の西縁部において縄文中期土器の散布が注意を引き、径150mほどを遺跡範囲としていた。これに対し今回の調査では、縄文土器の散布範囲が南東に約200m広がると共に、さらに近世の陶磁器類の散布が新たに確認され、上記の範囲に大幅に拡大することとなった。このように「土生新遺跡」は、縄文時代に加え、近世の遺跡としての性格を持つことが判明し、その範囲も大幅に拡大することとなった。

ところで今回の分布調査で採取した遺物の点数は、昨年度に比べて極端に少なくなっている。それは中世の遺物でとくに顕著であり、昨年度に「本地区内の南半では、中世の遺物はほとんど認められない」との判断をあらため確認したことになる。すなわち標高約60～70mを越えて開発が進行するのは近世以降なのであろう。近世にあっては、今年度あらたに発見した「土生新市野沢遺跡」や縄文土器に加えて近世の陶磁器類が採取されその範囲を拡大した「土生新遺跡」のように、主として今回対象地の北西部に遺跡の分布が広がっていた。こうして今回調査地の北半へも、近世の開発や居住が進展していたことが確認できたのである。

以上、昨年度の成果を受け継ぎながら今回の分布調査の成果を概述した。しかしながら今回の調査地内で本格的な発掘が実施された遺跡はなく、いずれもが遺物散布地としての取り扱いである。このことは、とりもなおさず遺跡の規模や時期、性格などについて不明確な部分が多いということである。また完全に地下に埋もれ、未確認の遺跡も存在することと思われる。今後は，さらなる遺跡の把握を行うとともに，これら遺跡の保護に務めていきたい。

（黒崎　直）

**参考文献**


相賀徹夫1977『世界陶磁全集』３，日本中世　小学館

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』№２　日本貿易陶磁研究会

金田章裕1993「医王山麓の平野における中世景観」『医王は語る』

上市町教育委員会2005『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』

九州近世陶磁学会2004『第14回　九州近世陶磁学会　資料　受容層の違いによる九州陶磁の様相』

後藤茂樹編1979『世界陶磁全集』２，日本古代小学館

齊藤孝正・後藤健一編1995『須恵器集成図録』第３巻，東日本編Ⅰ雄山閣出版

珠洲市立珠洲焼博物館1989『珠洲の名陶』

立山町教育委員会　富山大学人文学部考古学研究室1987『立山町文化財調査報告書第２冊　立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ1986年度』

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第７集　梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ―』

富山大学考古学研究室1989『富山大学考古学研究報告第３冊　越中上末窯』

中村浩編1995『須恵器集成図録』第１巻，近畿編Ⅰ雄山閣出版

能都町教育委員会　真脇遺跡発掘調査団1986『石川県能都町真脇遺跡―農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書―』

氷見市教育委員会　富山大学考古学研究室1999『氷見市埋蔵文化財調査報告第27冊　氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅵ1998年度』

福光町史編纂委員会1971『福光町史　上巻』福光町

宮田進一1988「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号富山考古学会

宮田進一1997「越中国における土師器の編年」『中－近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房


**関連調査報告書（既刊）**


富山県教育委員会1973『富山県福光町鉄砲谷遺跡・向山島・是ヶ谷遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会1974『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群　第二次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会1975『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群　第三次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会1976『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群　第四次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会1977『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群　第五次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会1978『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群　第六次緊急発掘調査概要』

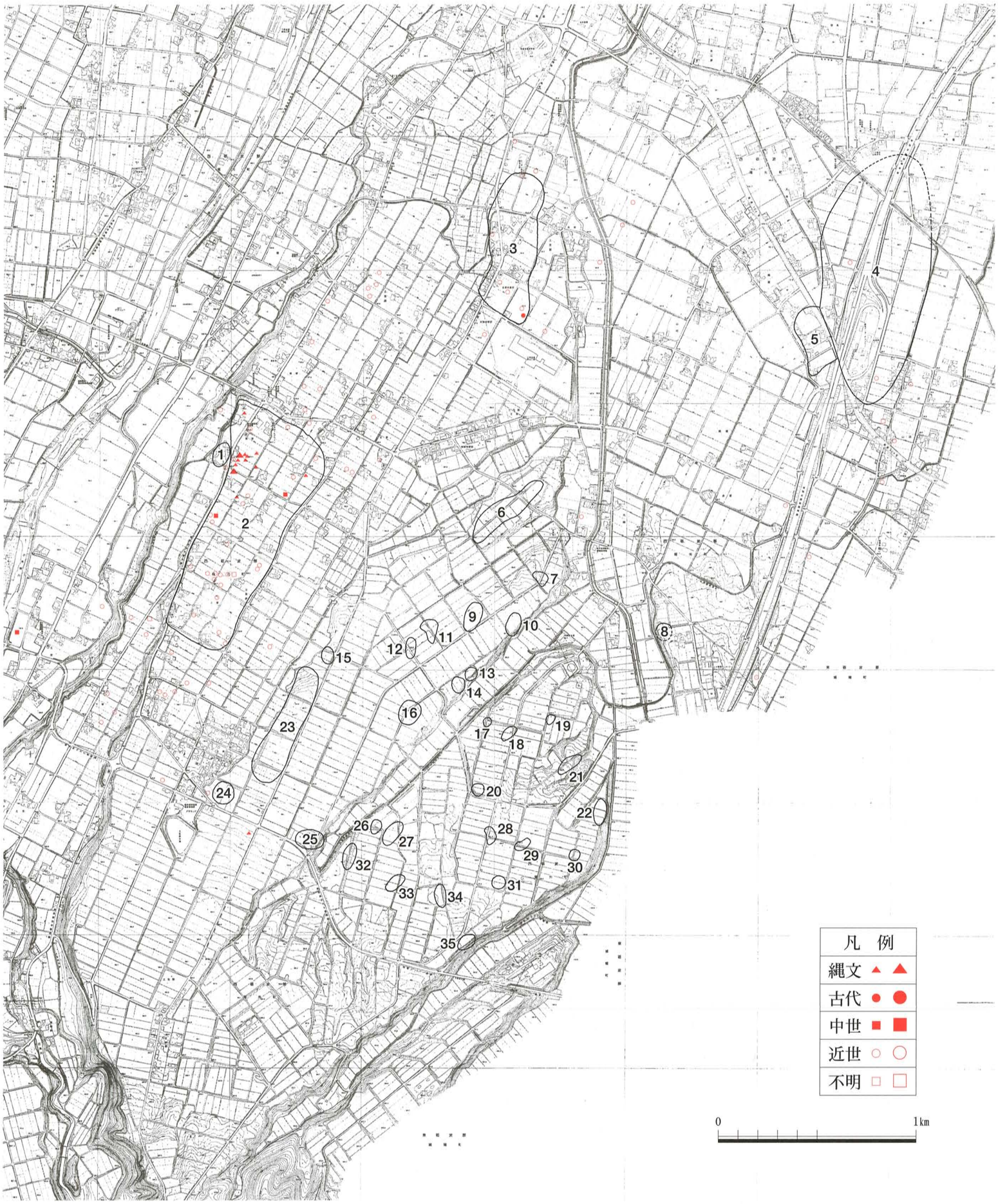
富山県埋蔵文化財センター1989『東海北陸自動車道遺跡試掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』

南砺市教育委員会2005『富山県南砺市　県営ほ場整備事業（担い手育成型）に係る埋蔵文化財試掘調査報告書―吉江南部地区―』
南砺市教育委員会2005『富山県南砺市　野丹保遺跡Ⅰ―県営ほ場整備事業（担い手育成型）吉江南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)』
南砺市教育委員会2006『富山県南砺市　野丹保遺跡Ⅱ―県営ほ場整備事業（担い手育成型）吉江南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)』
南砺市教育委員会2006『富山県南砺市　野丹保遺跡Ⅲ―県営ほ場整備事業（担い手育成型）吉江南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)』

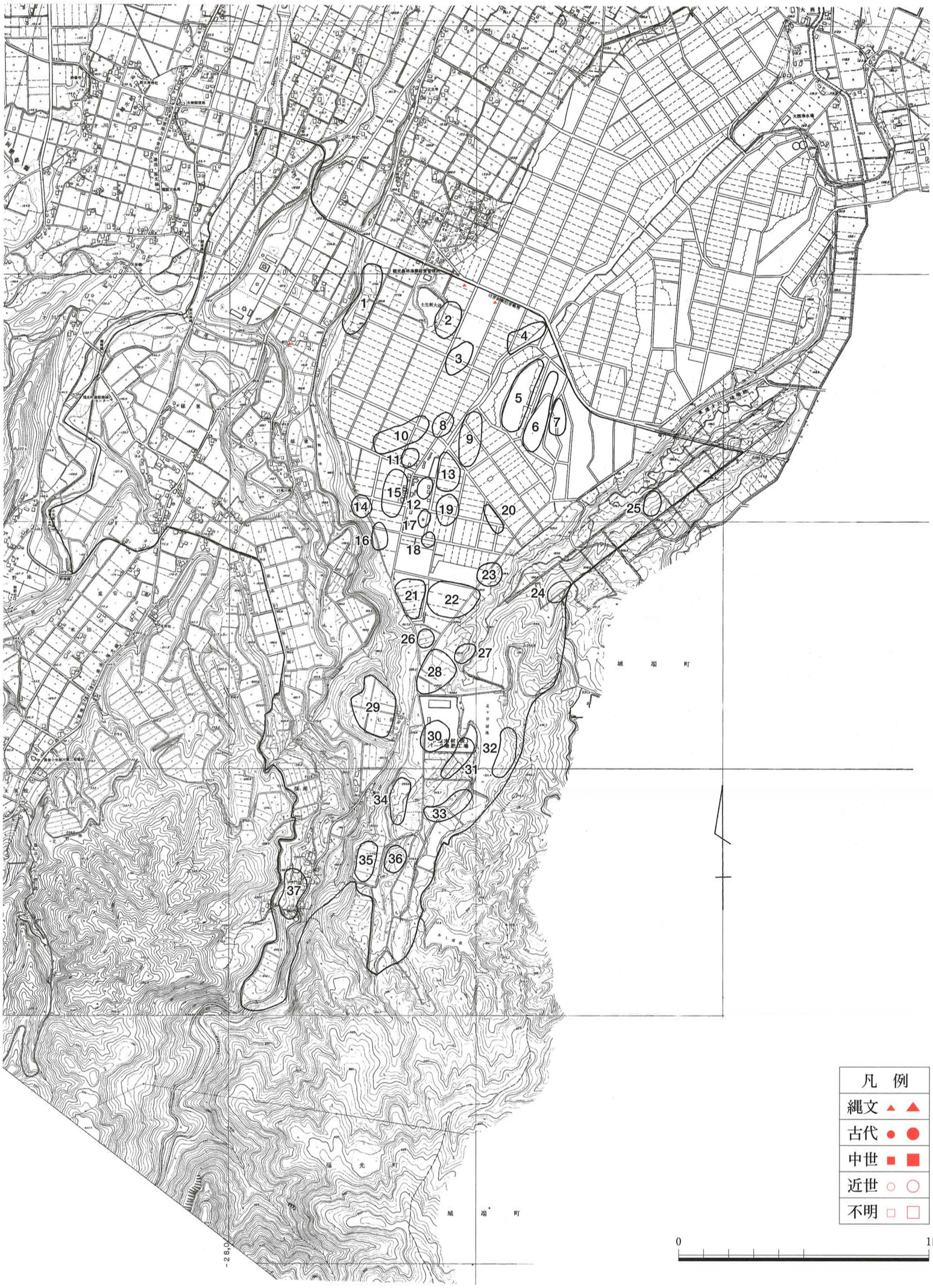
**第２表　調査結果遺跡一覧表（新規、内容変更の遺跡のみ記載）**

| 遺跡名 | 確認別 | 所在地 | 時　　代 | 種　別 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 土生新市野沢 | 新規 | 高　宮 | 中世、近世 | 散布地 | |
| 土生新 | 周知<br>範囲拡大 | 土生新 | 縄文中期、古代、中世 | 散布地 | 縄文時代遺跡範囲拡大。新たに近世の遺物散布を確認 |



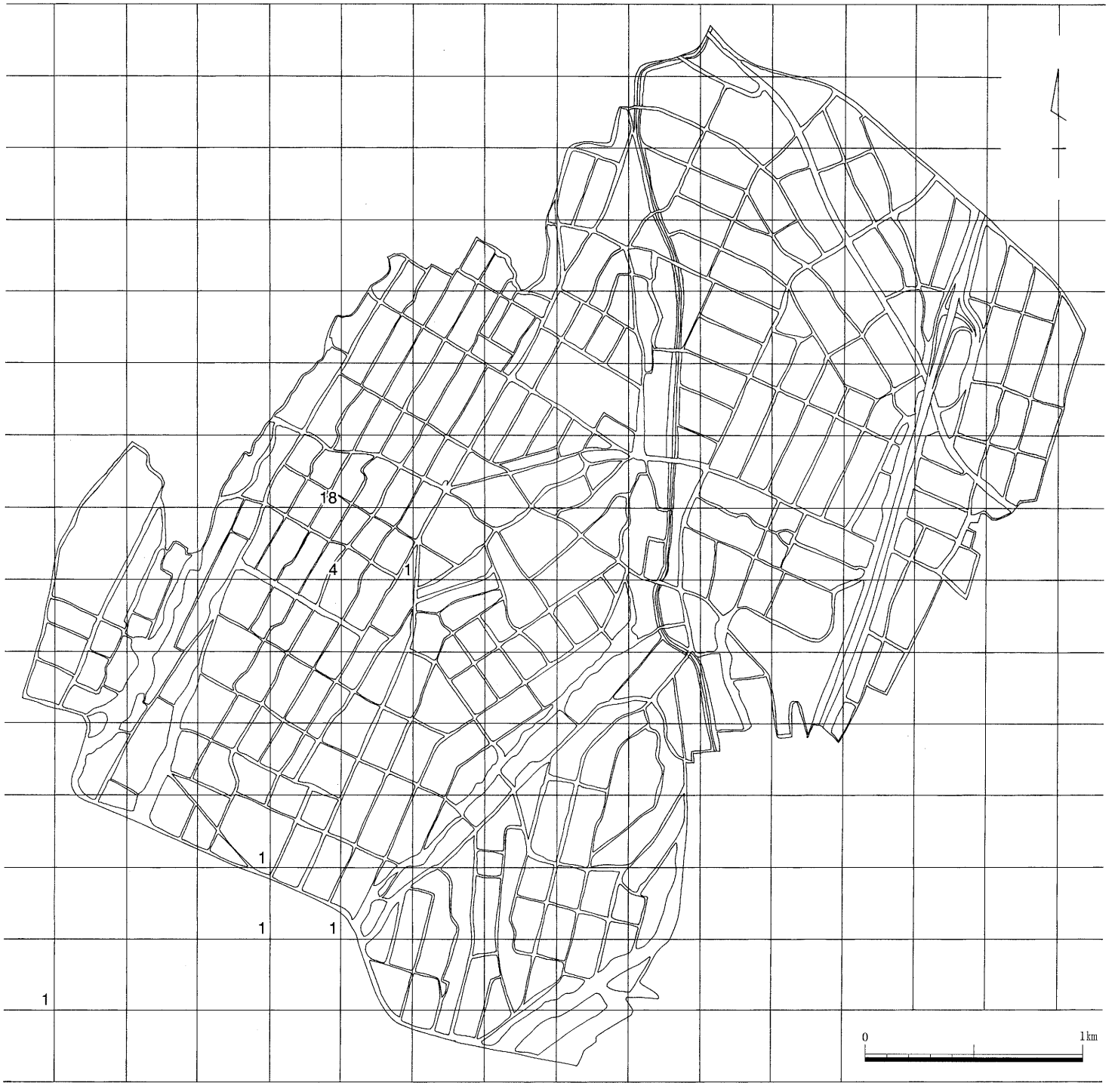

第4図　調査結果概要図1（S＝1/15,000）

1.土生新経塚　2.土生新遺跡　3.土生新市野沢遺跡　4.THJ－19遺跡　5.THJ－20遺跡　6.有田ヶ原E遺跡　7.番人原C遺跡　8.京塚
9.番人原B遺跡　10.番人原D遺跡　11.番人原A遺跡　12.万年台C遺跡　13.万年台A遺跡　14.万年台B遺跡　15.有田ヶ原A遺跡　16.立美A遺跡
17.中尾台J遺跡　18.中尾台K遺跡　19.中尾台L遺跡　20.中尾台I遺跡　21.中尾台P遺跡　22.中地山A遺跡　23.有田ヶ原B遺跡　24.有田ヶ原C遺跡
25.有田ヶ原D遺跡　26.中尾台B遺跡　27.中尾台C遺跡　28.中尾台N遺跡　29.中尾台M遺跡　30.中地山B遺跡　31.中尾台O遺跡　32.中尾台A遺跡
33.中尾台D遺跡　34.中尾台Q遺跡　35.中尾台F遺跡

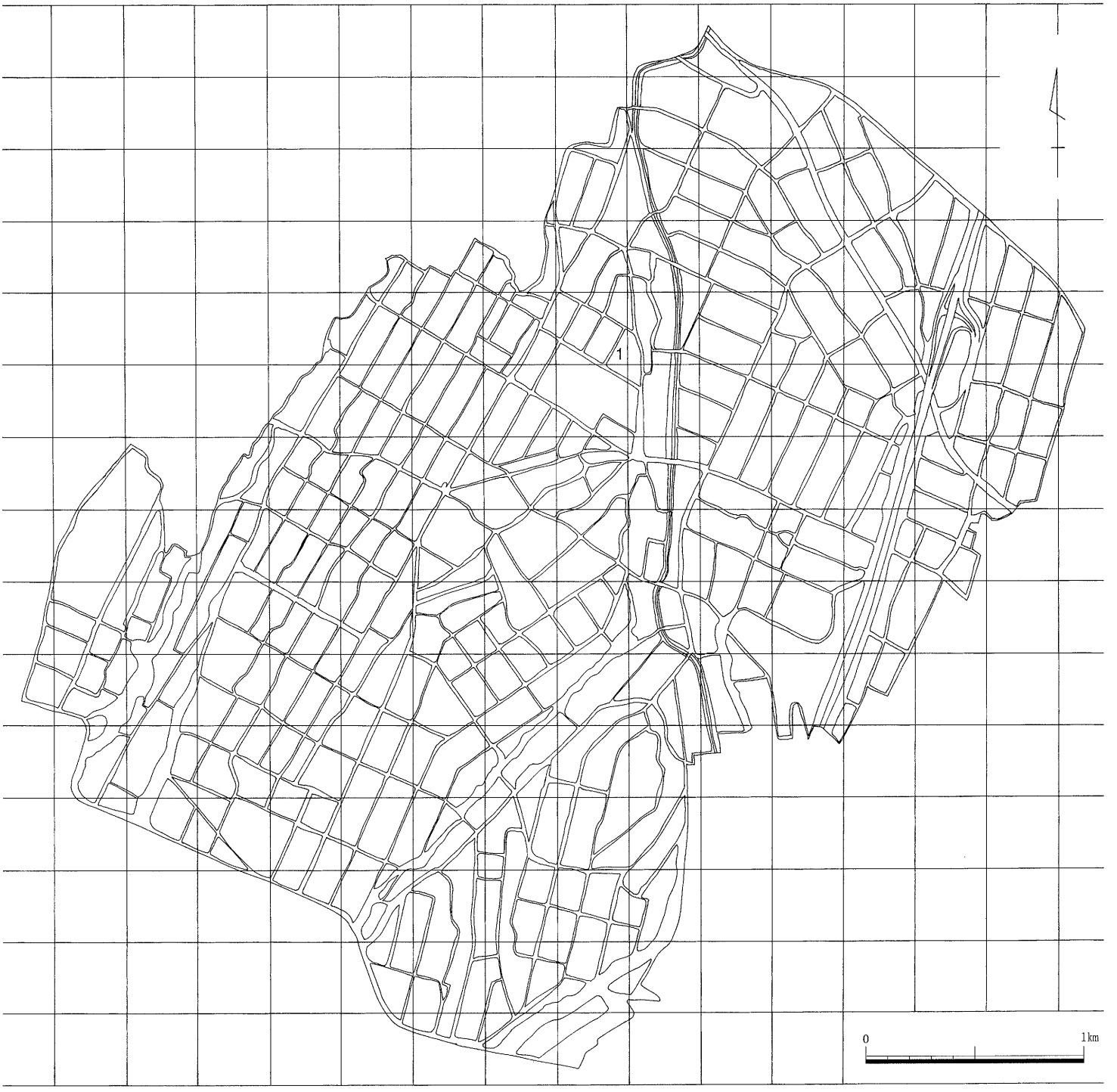



第5図　調査結果概要図2（S＝1/20,000）

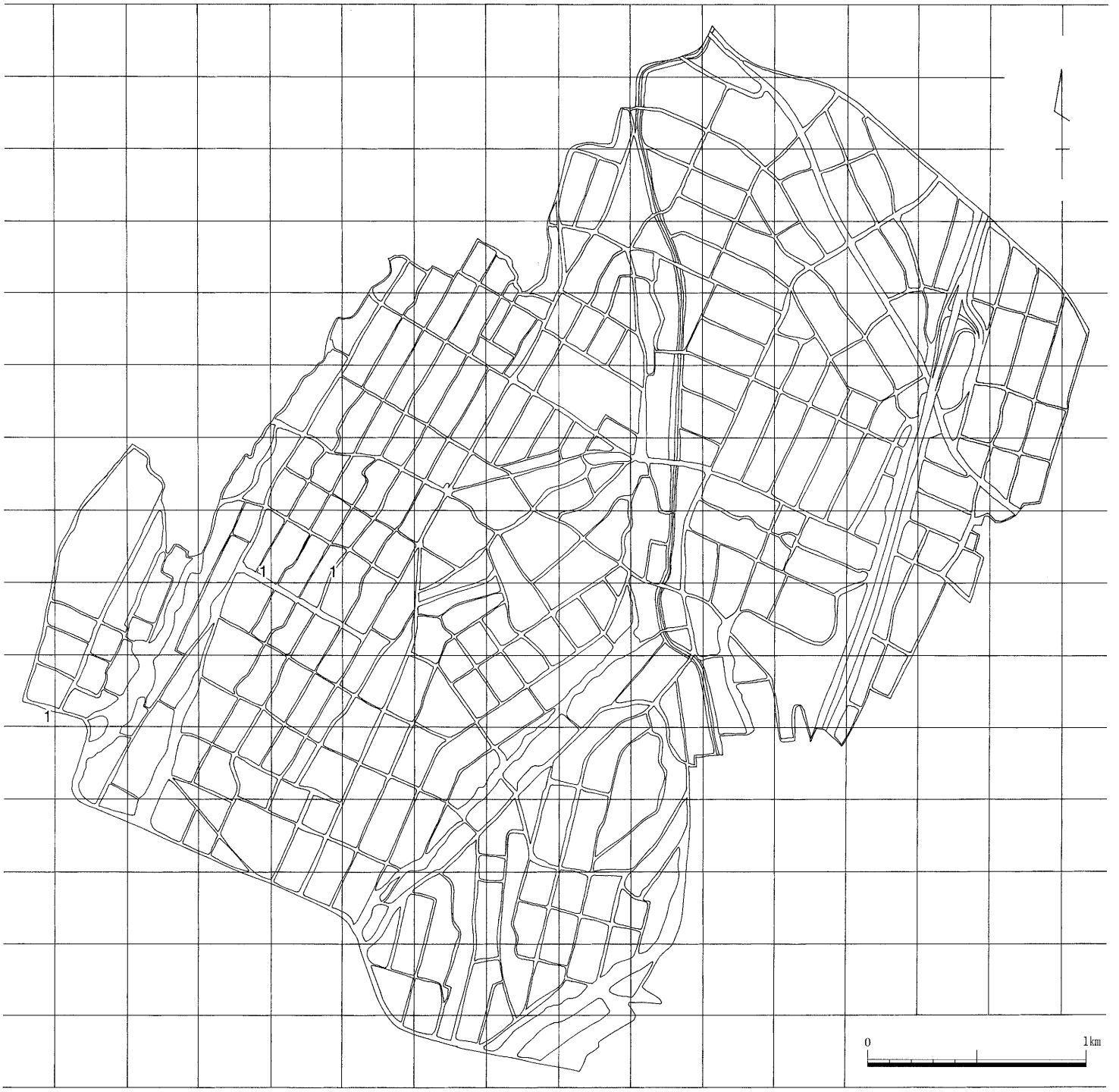
1.神明原C遺跡　2.立美B遺跡　3.神明原B遺跡　4.神明原A遺跡　5.開発田A遺跡　6.開発田B遺跡　7.開発田C遺跡　8.立野新Ⅰ遺跡
9.大西遺跡　10.立野新A遺跡　11.立野新K遺跡　12.立野新H遺跡　13.立美遺跡　14.立野新B遺跡　15.立野新J遺跡　16.立野新C遺跡
17.立野新G遺跡　18.立野新F遺跡　19.立野新E遺跡　20.立野新D遺跡　21.二郎江門堂台A遺跡　22.二郎江門堂台E遺跡　23.二郎江門堂台D遺跡　24.中台D遺跡
25.中台A遺跡　26.二郎江門堂台B遺跡　27.二郎江門堂台C遺跡　28.是ヶ谷A遺跡　29.七曲遺跡　30.是ヶ谷D遺跡　31.是ヶ谷B遺跡　32.是ヶ谷池遺跡
33.是ヶ谷C遺跡　34.鉄砲谷遺跡　35.向山島遺跡　36.坂ズリ遺跡　37.樋瀬戸道場遺跡



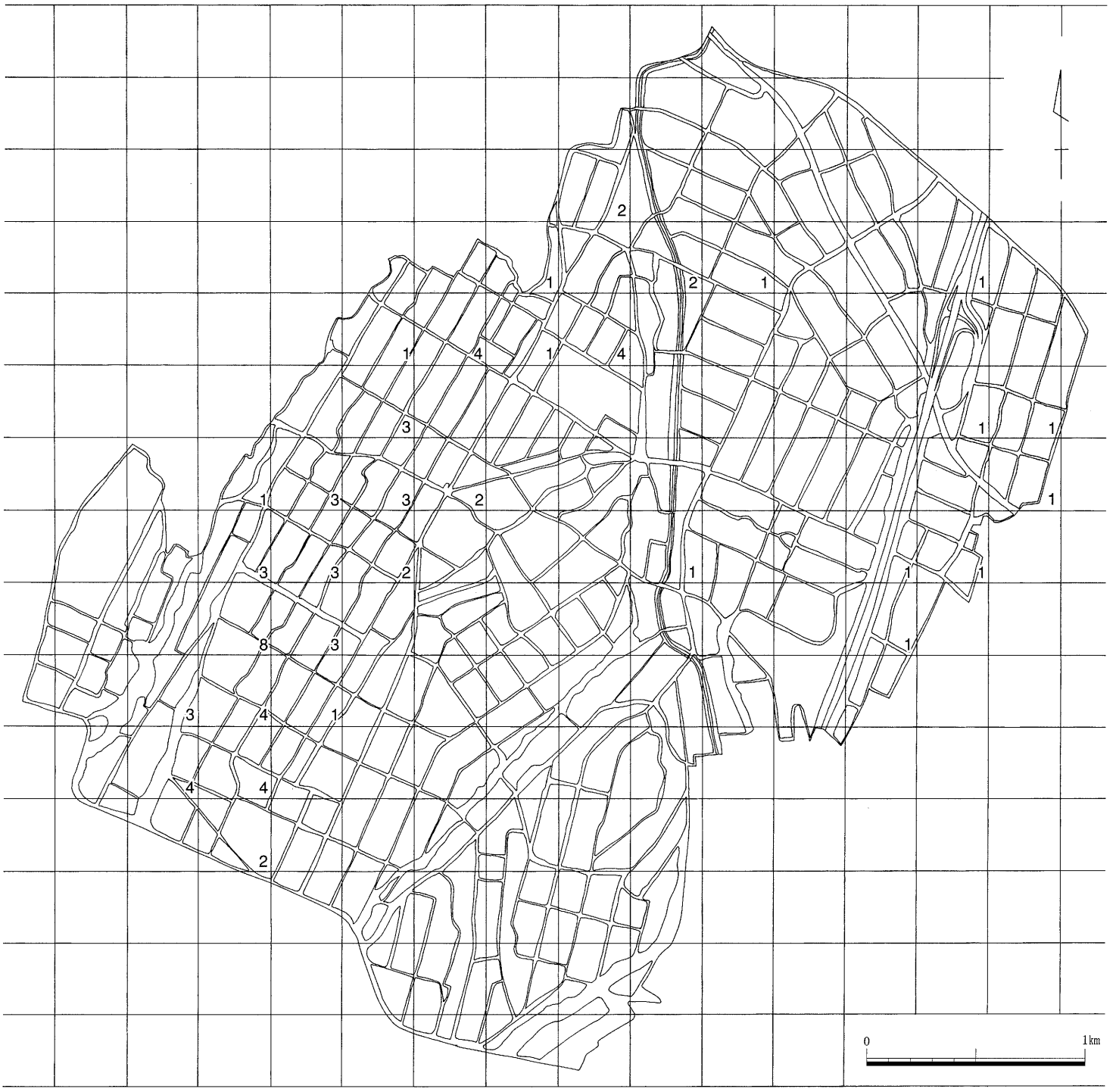

第６図　縄文時代の遺物散布状況（Ｓ＝1/20,000）



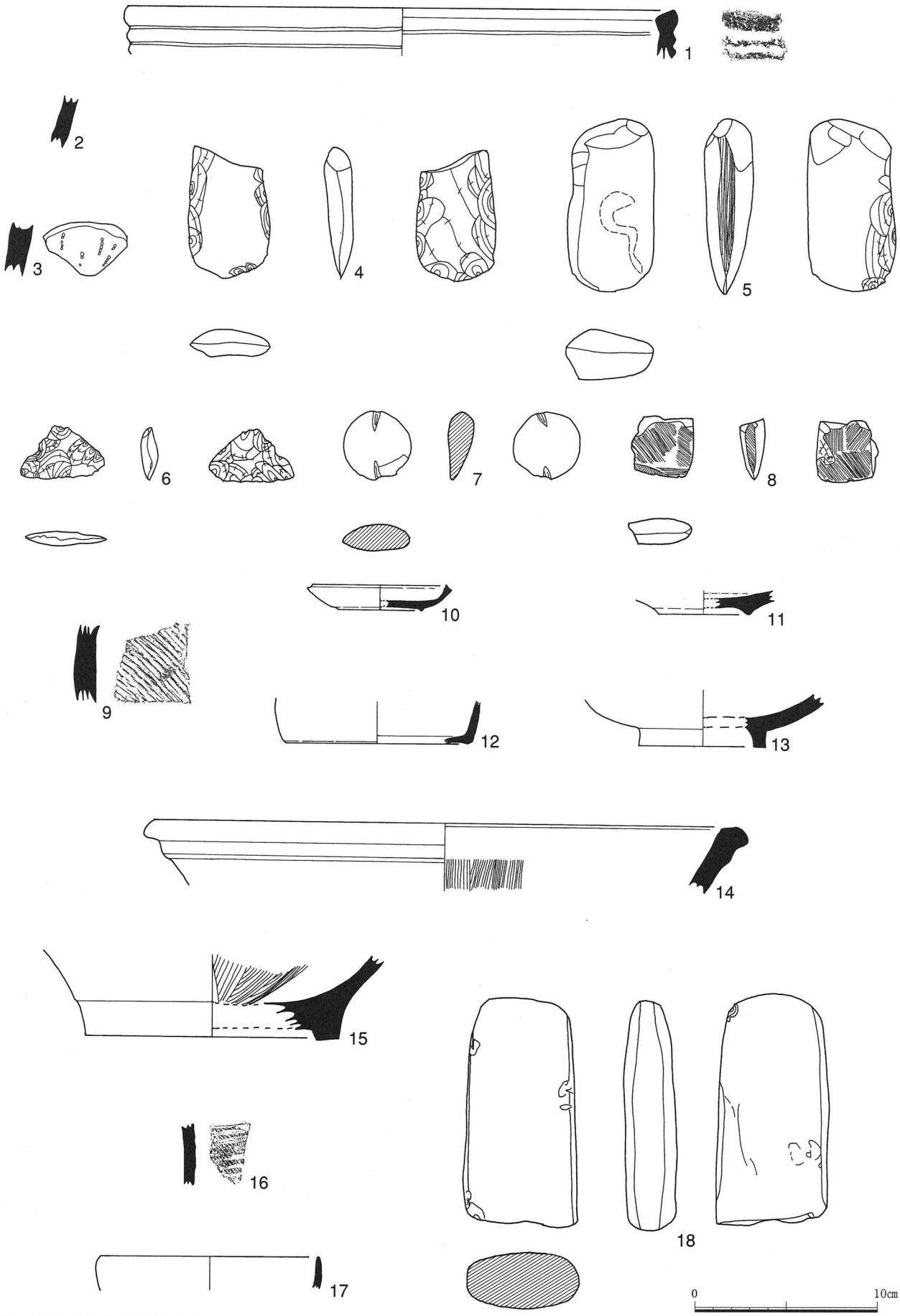

第７図　古代の遺物散布状況（Ｓ＝1/20,000）



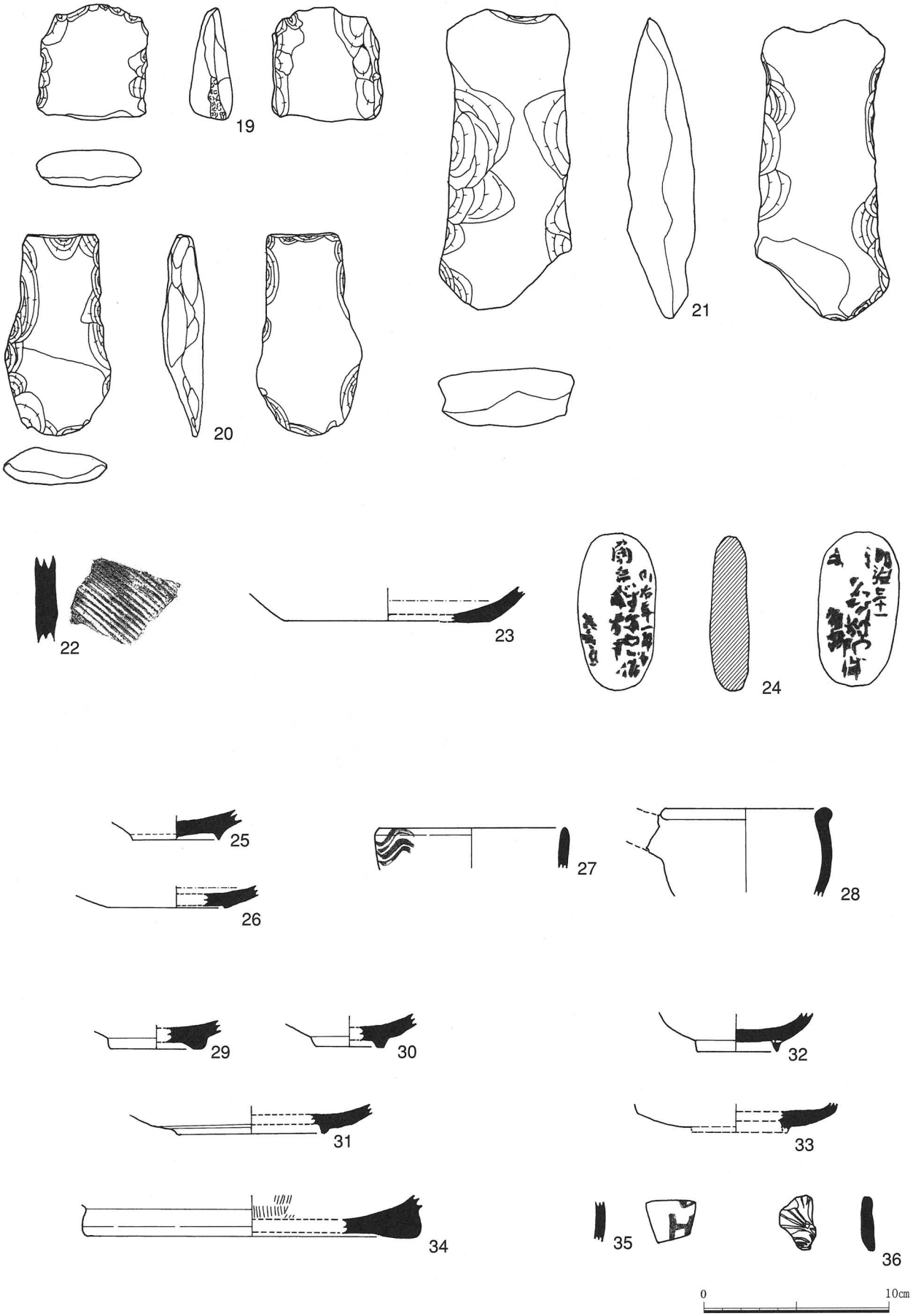

第８図　中世の遺物散布状況（Ｓ＝1/20,000）



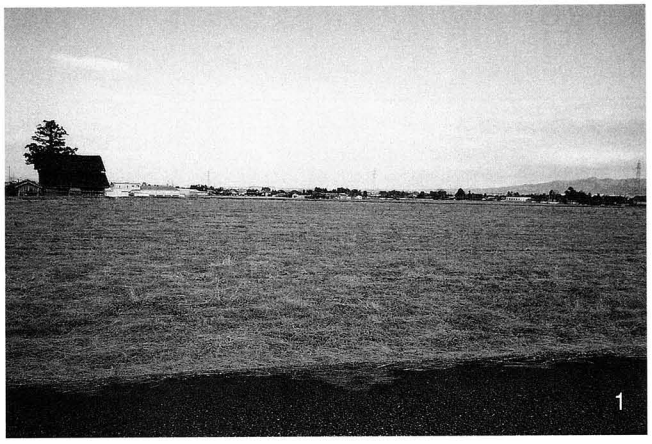

第９図　近世の遺物散布状況（Ｓ＝1/20,000）

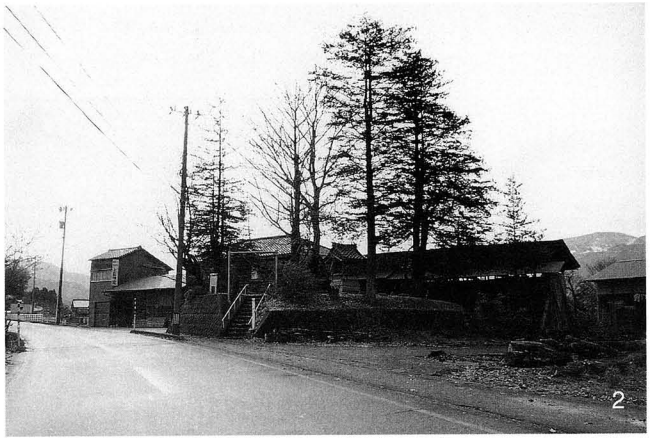


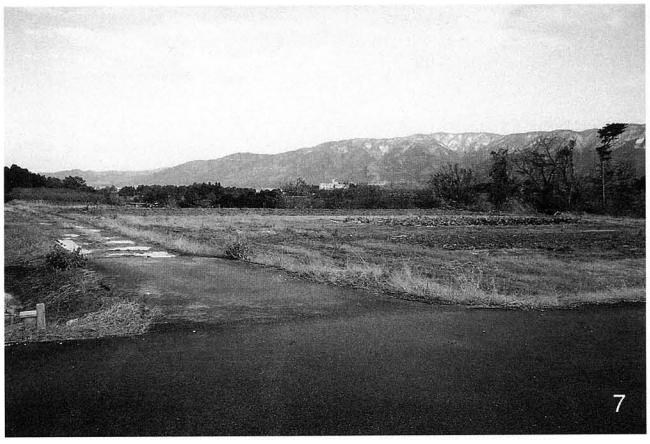

第10図　遺物実測図(1)
1～15 土生新遺跡　16、17 土生新市野沢遺跡　18 有田ヶ原C遺跡(S=1/3)




第11図　遺物実測図(2)
19～36 その他の採集遺物(S=1/3)

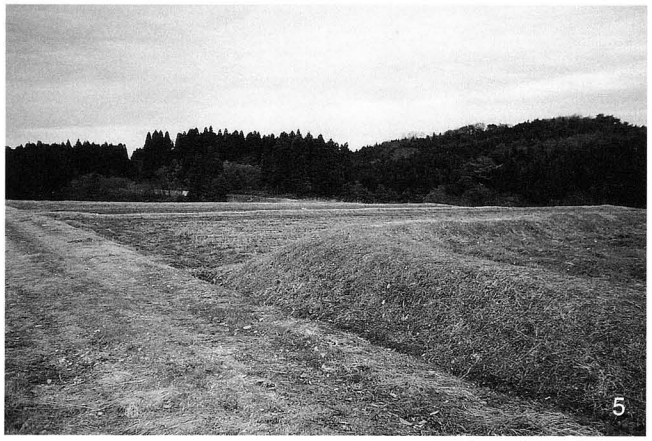


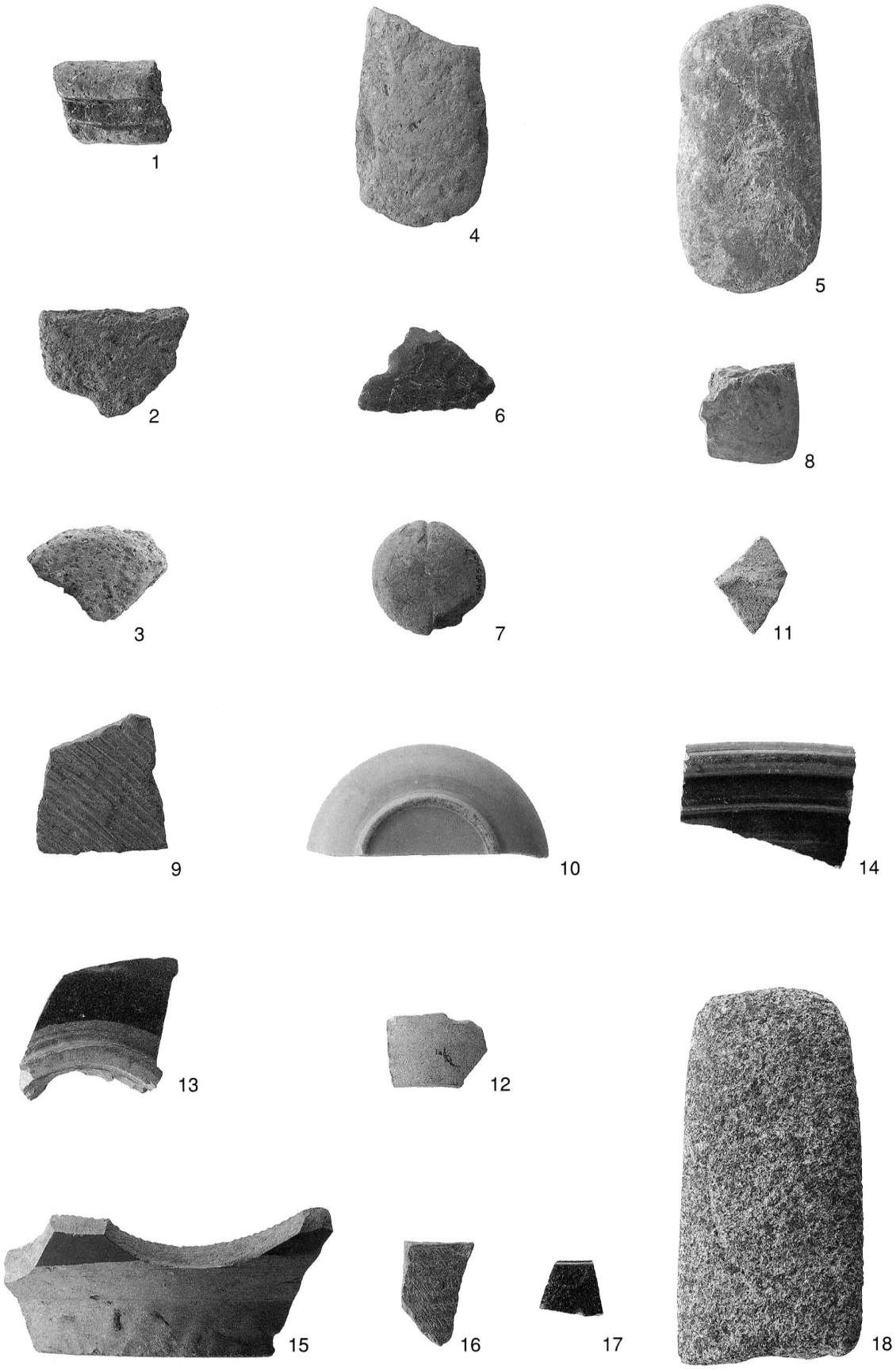


図版１　遺跡全景（1）
１．野丹保遺跡　２．土生新経塚　３．土生新遺跡　４．立美Ｂ遺跡
５．有田ヶ原遺跡群　６．立美Ａ遺跡　７．万年台遺跡群　８．番人原遺跡群

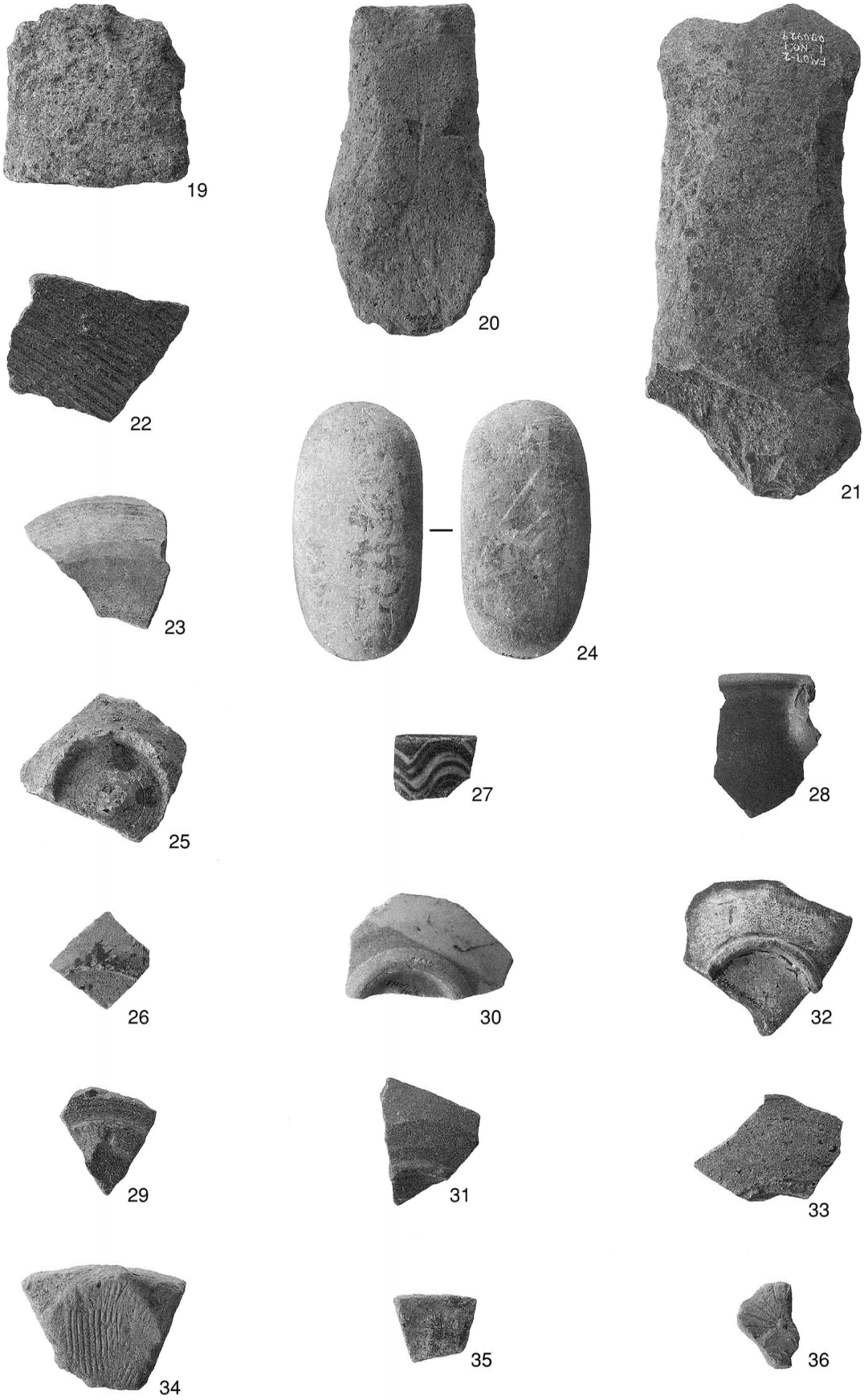
図版２　遺跡全景(2)
１．京塚　２．中地山遺跡群　３．神明原遺跡群　４．中尾台遺跡群
５．開発田遺跡群　６．大西遺跡　７．立美遺跡　８．立野新遺跡群



図版３　遺跡全景(3)
１．二郎江門堂遺跡群　２．中台遺跡群　３．是ヶ谷遺跡群　４．鉄砲谷遺跡
５．向山島遺跡　６．七曲遺跡　７．踏査状況　８．調査参加者




図版 4　遺物写真（1）




図版５　遺物写真（2）

# 報告書抄録

| | | |
|---|---|---|
| ふりがな | とやまけん　なんとしまいぞうぶんかざいぶんぷちょうさほうこくさん　ふくみつちいき2 | |
| 書名 | 富山県　南砺市埋蔵文化財分布調査報告3　－福光地域2－ | |
| シリーズ名 | 南砺市埋蔵文化財調査報告書22 | |
| 編著者名 | 黒崎直　高橋浩二　高橋彰則　今津和也　上原利予　千葉真吾　佐藤聖子 | |
| 編集・発行機関 | 南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 | |
| 所在地 | 〒932－0292　富山県南砺市井波520<br>TEL(0763)23－2014 | 南砺市教育委員会 |
| | 〒930－8555　富山県富山市五福3190<br>TEL(076)445－6195 | 富山大学人文学部考古学研究室 |
| 発行年月日 | 西暦2008年3月21日 | |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積（m²） | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 市内遺跡（しないいせき） | 富山県（とやまけん）<br>南砺市（なんとし）<br>地内 | 16210 | － | 36°<br>30′<br>50″ | 136°<br>52′<br>00″ | 20070414<br>20070415<br>20070929 | － | － |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 市内遺跡 | － | 縄文時代<br>古代<br>中世<br>近世 | － | 縄文土器、打製石斧<br>須恵器、土師器<br>珠洲、越中瀬戸<br>近世陶磁器 | － |


**南砺市埋蔵文化財分布調査報告3**

－福光地域2－

平成20年3月21日

編集　南砺市教育委員会
発行　富山大学人文学部考古学研究室

印刷　牧印刷株式会社